

第十五章 京都 一 正門坊

雪に覆われた冬の都は、秋とは別の趣があつて美しい。

だが、義経がいなくなって、また強盗、追剥、放火など治安が悪くなってきた。

治安だけではない、鴨川の河原には、相変わらず疫病による病死者や飢饉の影響で行き倒れた餓死者の死体が数多くころがっているらしい。

清水寺は、六条堀河館から徒歩でいかれる距離にある。しかし、雪道の上、途中で平家一族の屋敷群があつた六波羅の広大な焼け跡を通らなければならず、強盗の不安もあるので、網代車でいけるところまで行くことにした。また、義経出陣後の留守居として残っていた初老の郎党重平にも付いてきてもらう事にした。

六条から五条大路へ入り、鴨川を五条大橋で横切る際に、北方を見ると四条河原の辺りに粗葺で囲まれた小屋があり、粗末ななりをした多くの人々がその小屋を取り囲んでいるのが見えた。

「あれは何をしているのでしょうか」

郷子が、志乃に訊くと、志乃は、簾を上げて付き添いの重平としばらく話していたが、簾を下げると郷子に言った。

「あの小屋で四条の聖といわれるお坊さまがお説教をされていて、貧しい人がそのありがたい念仏を聞くために集まってくるのだそうです」

「四条の聖？」

「正門坊という名の僧侶だそうです、もとはといえば、亡くなられた義朝公の家来で本名鎌田正近という武士だそうですぞございます」

「正門坊？ 元義朝さまの家来？ その名は聞いたことがあります」

郷子は、僧侶の名前までは覚えていなかったが、義経から聞いた話を思い出した。

「確か、義経が鞍馬寺で遮那王と呼ばれていた頃、山にやってきて義経に源氏の嫡流義朝さまの子供であると教えてくれた僧侶だわ」

「そうだとすれば、もう十六、七年も前の話になりますね」

「義経に、平家の討伐と源氏の再興を薦めたのに、義経が都に凱旋したときに、なぜ義経の前に現われなかったのかしら」

「きっと、僧侶として生きる事に決められたのでしょうか」

「いつか、直接お会いしてみたいわ」

網代車は、六波羅の焼け跡の横をを通りぬけると、清水坂の前で止まった。大路はここまでで、清水坂は狭い坂道である。ここまで来ると、清水寺に参拝に行く人、参拝から帰ってきた人で賑わっている。

老若男女、富者貧者あらゆる階層の人々が参詣しているようだ。

郷子と志乃は、そこで網代車を降りて草履をはくと、音羽山にある清水寺に向かって急な坂道を上って行った。

坂を上りきって西門をくぐると、目の前に三重の塔がある。参拝者の群れについて進んでいくと、講堂などの幾つかの建造物を経て本堂に行き着く。

広い本堂では、抹香の煙が立ち籠めるなか、おびたしい数の善男善女がお経を読誦する声が地の底から湧き出るように渦巻いている。

郷子と志乃は、草履を脱いで手に持つと、本堂に上がっていった。何をしていたのか判らないので、人々の後ろに座って、読誦を聞きながら手を合わせる。

清水寺の御本尊は、十一面千手観音菩薩で、法華経によれば、だれでも観音菩薩の名を一心に唱えれば、その声を聞きつけて特別な念力でどんなに困難な願いでも聞いてくださるという。

(観音菩薩さま、義経さまが戦で死ぬ事のないようにお守りください)

郷子は、何回も何回もひたすら観音菩薩の名を唱え、お願いした。

丁度百回唱えたところで、あまり無理をするとお腹のややに差し支えると思い、志乃に合図して本堂をでた。その先は有名な清水の舞台である。端の手すりの所に立って下を覗くと、そこは先も見えない深い谷底で、背筋がすっと寒くなって足がすくんでしまう。郷子は、手すりにしっかりと抱きついた。遠くに白雪で覆われた都の建造物の一群が山と山の隙間から小さく見える。

志乃が言った。

「この舞台から飛び降りたのに助かった人がいるそうですよ」

「まさか、この舞台から飛び降りたら誰でも死んでしまうのではないですか」

「その人は清水寺の入り口の石段のところで、土地の若者たちと喧嘩をして切りあいになり、この清水の舞台まで逃げてくると、今度は、向かい側からも若者達が刀を抜いて向かってくるのを見て、とっさに戸板を両脇の下に挟んでここから飛び降りたのだそうです。幸い戸板が風に煽られて、鳥のように飛び、静かに着地したそうです」

「この舞台から飛び降りて・・・助かったのですか」

「なんでも飛び降りる前に『観音さまお助けください』と祈ったのだそうです」

「観音さまにお願いすれば、どんな無理なことでもかなえてくださるということなのかしら」

「恐らくその人は、観音さまを信じていたのでしょうね。そうでなければ、こんな高いところから飛び降りられませんもの」

郷子は、もう一度谷底を見下ろした。

(死ぬ気にならなければ、わたしにはとても出来ないわ)

本堂を下に降りていくと、清水が山腹から懇々と湧き出ているところがあり、多くの人が順番に並んで、その水を飲んだり、顔を洗ったりしている。

音羽の滝と呼ばれ、神聖な黄金延命水として尊重されているらしい。

そして、清水寺という名も、この清水に由来しているとのことだった。

郷子と志乃は、順番を待つと、その水を手ですくって飲み、余った水で顔を清めたあと、

清水寺を後にした。

三日後に、梶原景時が二千騎がを引連れて都に到着すると、すぐに堀河館に顔をだした。景時は、自分の館のようにずかずか入ってくると、郷子の部屋の襖を勝手に開けた。志乃がきつと睨んだが景時はいさい構わなかった。

「義経は何処にいる」

「頼朝さまの御命令を受けて出陣いたしました」

「そんなことは知っておる。何処にいるかと訊いている」

「わたしども女には判りません」

景時は、訝しげに郷子を見た。そして間違いに気付いたに相違ない。

すこし躊躇した後、いままでの態度を急に变えるわけにもいかなかったのか、あるいは、自分の憤懣を誰かにぶつけたかったのか

「正室にも、何処に行くとも言わずに出陣したのか」と自問するように言った。

「・・・・・・・・」

郷子が、景時の無礼に腹を立てるでもなく、顔色も変えず静かに正座しているのを見て、自分の非礼を恥じていたたまれなくなった反動か、音を立てて襖をしめると出て行った。

「須美！ 須美はいないか」

景時が、怒鳴ると、

「こちらへ」という須美の声が聞こえた。

景時は、須美の部屋に入ったらしい。

郷子と志乃は目を見合わせた。志乃がずっと部屋を出て行く。

「気をつけて」

郷子が、小声で志乃に言葉をかけると、志乃は目を一回閉じてうなずき判ったと合図する。

しばらくすると、景時が須美の部屋から出てくる気配があって、

「これからも、詳しく報告してくれ」という声を部屋に残すと去って行った。

すぐに、志乃が郷子の部屋に戻ってきた。

「見つかりませんでしたか」

「大丈夫です。わたしの部屋から襖越しに聞いていましたから」

「どのような話でしたか」

「義経さまは、いまは渡辺ノ浦というところで、船が出来るのを待っているそうです。やっと五艘できたとか。そしたら、景時殿が『わしはもう神埼に百艘以上は準備させているぞ』とカラカラと笑っていました。」

それと、義経さまは、熊野水軍の頭目湛増に味方になることを働きかけているそうです。義経さまは、渋る弁慶を説得して無理に親子対面をさせるために弁慶殿を使者に立てたのだそうです。

湛増が弁慶殿に言うには、

『熊野権現に祈ったら白旗に味方せよとのお告げがあった。

念のため、鬪鶏で白いニワトリと赤いニワトリを七番戦わせて見たら、白いニワトリが七番勝ったので、白の味方をする事にした」とのこと。でも、義経さまは、湛増はもっともらしい理由をつけて話しているが、本音は弁慶殿を赤子の時に捨てたことに負い目を感じていて、弁慶殿を応援する事にしたのだろうと思っている」

「まあ、須美はなんでそんなことまで知っているのかしら」

「きっと、有力な情報網があるのでしょう。それに、須美殿は、それを隠すつもりもないようですよ。きっと、鎌倉が後ろについているからでしょう」

「どうしてそれが判るのですか」

「須美殿は、優れた武芸者です。わたしが、隣の部屋で聞き耳を立てている事ぐらいは、先刻ご承知で話されていると思いますよ」

（須美は、鎌倉の間諜なのだ。そして、それを隠そうともしていない。

これは、義経に対する警告なのだろうか）

清水寺に参詣するときに同行してくれた初老の郎党重平が、面識のある四条の聖に郷子が小屋を訪れたいとの希望を伝えたところ、彼の方から六条堀河の館を訪問してくれる事になった。

数日後四条の聖は、河原の小屋でのお説教を終えた後の夕刻にいつも通りの薄汚い墨黒の法衣姿で堀河館にやってきた。

郷子は、志乃に命じて彼を義経が重要人物との面会に使用している上部室に通して、豪華な食事にお酒をつけてもてなした。

食事が終わった頃を見計らって、郷子は部屋に顔を出した。

聖の前に正座すると丁寧に挨拶した。

「義経の妻郷子でございます。お食事は気に入っていただけましたでしょうか」

「久しぶりにおいしい食事をいただいた。信者が米や野菜などを差し入れてくれるので、食うものに困る事はないが、なかなか美味しいものにはありつけぬ。それに聖は、御酒など飲まないだろうと思っているから、酒の差し入れはない。今日は、久しぶりにいい気持ちになり申した」

豪華な食事に酒をつけたのは、重平の提言である。

「それは、ようございました。本日は、四条の聖さまのほうからご足労いただき真に恐縮いたしております」

「四条の聖とは、信者が勝手に付けた尊称。聖などと呼ばれるほどの者ではござらぬ。ただの正門坊でござる。もっとも、それも自分が勝手にそう称しているだけのことで、かつての義朝軍の同僚重平殿がご存知のとおり、もともとは武士でござった」

正門坊は、重平によって素性が割れているせいか、率直に話した。

（信者の前では、このように素性を明かされたり武士言葉で話されたりするようなことは

ないのだろう)と郷子は推測する。

「義経が話してくれたのですが、義経が鞍馬寺で遮那王と呼ばれていた頃に、あなたさまから、清和源氏の嫡流の系図を見せていただき大変な衝撃を受けたとか」

「そういうことがありましたな。あれは、平治の乱からもう十年以上も経った頃だが、某は洛北の寺に隠れて仏の修行の真似事などをしていた。だが、その頃はいつか源氏を再興して、武士で出世したいという野心を捨てきれずにいた。それで、源氏の嫡流が鞍馬寺に預けられているという噂を聞きつけ、その稚児を捜しに行ったわけだ。幸い見つけることができ、系図を見せたところ大変な衝撃を受けたご様子でしたな。それまでは、表面上は一条長成の子供として扱われていたわけだから、『俺が貴族の子供であるはずがないと思っていた。俺に武士の血が流れているのは判っていた』と大声で叫んでついには号泣して危うく失神するほどの騒ぎだった。某は、その時この稚児は必ず将来源氏の大將として名を成すに違いないと確信した次第。

ただ、稚児には、このことは、絶対に他言してはならないといい含めて鞍馬山を去った。

あの時の稚児は、十七年後に源氏の総大將として、都に凱旋してきた。

そして、いまや従五位下の判官殿と呼ばれるまでになった。

あれほど権力を極めた平家もいまや滅亡の危機に瀕しているではないか。

数年前の『平家にあらずば、人にあらず』と嘯いた連中もいまや全ての権力を失って、四国の海に浮いている。

これだけでも大変な変革だが、さらに、平家追討のため屋島に遠征したと聞いて、もし判官殿が、海戦で平家を打ち破り、平家を滅亡させれば、この国の統治の形ががらっと変わる。武家政権が確立し、幕府ができ政治の実権が朝廷から武士に移るだろう。ここ京都も形ばかりの都になってしまうに違いない。

某は、時々怖くなる事がある。もし、このような変革をもたらした原因が、某が遮那王と呼ばれた稚児に源氏の系図を見せたために起こったものなら、某がこの国の歴史を変えたことになるのではないか。

逆説的に言えば、某が、もし遮那王に源氏の御曹司であることを知らせなかったら、遮那王は出家していたに違いないから、今のような変革は起こらなかったのではないか。

某は、判官殿の無事を祈りながら、自分の播いた種がこの先の歴史にどのように影響を与えるのか外から静かに見守りたいと思っている。

だから、判官殿がこの堀河館にいる事は知っていたが、顔を出さなかったのだ」

「義経は、この国にそれほどまでに大きな影響をあたえているのですか」

「自分では、ただ、父を殺した平家憎しとの存念で闘っているのだろうが、知らず知らずに歴史を変える役割を果たしているのは間違いない。政治の実権が朝廷や貴族から、武士に移るという事は、庶民の生活も変えることにもなる。某の粗末な小屋に通ってくるのは、必死に働いてもほとんどが明日の飯も満足に食えぬ貧乏人ばかりだ。一方で貴族社会は、全国から集めた年貢で、働きもせず一日中詩歌音曲や色事に明け暮れている。いままでの

武士団は、特に平家はそんな貴族社会に憧れて力を貸し、自分もその仲間入りすることを望んだ。

だが、鎌倉に幕府が開かれ質実剛健を旨とする頼朝殿によって政治がおこなわれれば、それも変ってくる。判官殿の役割は庶民の生活にとっても非常に重要な意味がある」

「それで、義経の無事を祈っていただいているのですね」

「某は、平治の乱で敗走して大原の里にある来迎院に逃げ込んだ。

その宗祖良忍上人は、念仏三昧中に阿弥陀仏から融通念仏の教えを授けられたという」

「融通念仏とは、なんでしょうか」

「一人の念仏は全ての人の念仏に通じ、全ての人の念仏は一人の念仏に通じる。つまり念仏の功德が融け合い、通じ合うということじゃ。だから、某が、念仏を唱えれば、その功德が判官殿に及ぶ事になる」

「念仏の功德は、身体の無事だけなのでしょうか」

「無論それだけではない。某の小屋に通ってくるのは、みんな病人か貧乏人か乞食さ、彼らはどうの昔に現世の利益など諦めている。彼らが求めているのは、せめて死後は極楽浄土で安楽に生きたいと願っているのさ」

「念仏を唱えれば、極楽浄土へ往かれるのですか」

「そう教えているものがある」

「どなたでしょう」

「法然という名の上人が、全ての人はただ念仏を唱えれば、誰でも平等に極楽浄土で往生できると説いている」

「全ての人が平等に……ですか？」

「そう、身分の違いも、富者も貧者も男女の区別もなく、善人はもちろんどんな悪逆非道なおこないをした者もだ。某などは、もともと武士であったから、直接間接に殺傷の罪を犯してきた。だから、某は、浄土での往生は諦め、地獄に行くしかないと思っていた。だが、法然上人は、そんな某でも、南無阿弥陀仏と唱えれば極楽浄土で往生できると説いている」

「仏の修行は必要ないのですか」

「念仏の他には、学問も知識も難行苦行も一切必要ないと説かれている。こんな事を、某などの学問も知識もなく、難行苦行もしたことのない似非坊主がいえば、笑止の極みだ。だが、法然上人は、十三歳から比叡山延暦寺であらゆる修行に取り組み、全ての学問を修められた知恵第一の法然房と称されたほどのお方だ。比叡山でも並ぶもののない優れたお方がこのようなことを説いているから価値がある。某も、法然上人の居る東山山麓の吉水の草庵には何度も足を運んでありがたい説法を聞いた。近いうちに、四条の小屋をたたんで、法然上人に弟子入りし、本格的に修行しようと考えているところだ」

「ただ南無阿弥陀仏と唱えればいいのですか」

「法然上人によれば、阿弥陀如来は、一切の衆生を救うと堅く誓われた仏さまだそう。

南無とは、そんな阿弥陀仏に帰命すること。すなわち、阿弥陀仏の慈悲を心から信じて、その慈悲にすがるために阿弥陀仏を呼ぶ声が南無阿弥陀仏という念仏なのだという。そして、その念仏を聞き届けた阿弥陀仏が善人も悪人もわけへだてなく平等にあらゆる人を浄土に導いてくださるというのだ。某も、これを聞いたときには、自分のような殺傷を犯した者も救われると判って涙を流すほど嬉しかった」

正門坊が帰った後、郷子は深い物思いに耽った。

義経が、この国の歴史に影響を与えるかもしれないこと。

浄土での往生のこと。

(極楽浄土のようなところで、義経とややとわたしと三人で暮らせたらどんなに幸せだろうか。現世でそのような幸せを望むのは無理な事なのだろうか)